西精工様より

社内木鶏会 感想用紙

2019年 8月21日

9月号

記事名 ：読書習慣が学力を決める

いちばん心に響いたことば

子どもは本能的に言葉を欲している。幼い子への読み聞かせというのは、親が子供に心を寄せ、子供はそれを受けて感情を揺さぶられる、そういう作業だったことが脳科学で見えてきたんです。

① そのことばが、なぜ響いたか

二人の息子が子供の頃、毎晩読みきかせをしていました。なつかしい記憶は、親子のよい思い出となって、今でも本の貸し借りをしたり、絵本のことが話題になったりします。今回、古典であれば、平家物語の「扇の的」がいいと紹介されていました。「ひいふっとぞ射切つたる・・・」という一文はたぶん子供も覚えていると思います。

読み聞かせは、人間だけが持つ、思いやりや感謝、利他の心が育つためにと考えていたわけではありませんが、私自身の心の安定には繋がっていたと思います。

② 具体的に日々の生活の中で、どう活かすか

今は、読む本に偏りがあります。ベストセラーということで平積みされていても、手に取る本は偏っています。そう気づいた時は、一度古典の本を読むようにしています。映画を見たら、小説も読んでみると面白いよと息子が勧めてくれました。本をきっかけにして、息子が何を感じているのかが知れることは、すごく楽しいことです。読書から学ぶことがたくさんあるので、友のように、手元にいつも何冊かの本をそばに置いておくようにします。

③ チームメイトとの話し合い

習慣になるまでやる（血肉化するまで）とよく言われます。フロー状態も自分がそのことを大切に思っているから、その状態になるのだとみんなとの対話から感じとることができました。膝を突き合わせての木鶏会だからこそ、得られる気づきがありました。